

経済為替ニュース

SUMITOMO MITSUI TRUST BANK, LIMITED FX NEWS

第2423号 2018年09月03日(月曜日)

《 always a tough month 》

週末に読んだCNBCが「September is always a tough month for stocks but this year there are even more hazards」と書いているのを見て、「確かに今年はそうかも」と思いました。このタイトルには為替の単語は登場していませんが、株価が動くと言うことは、同時に為替も動揺する可能性があると言うことです。荒れば暫くは円高だと思われる。

今年の場合は3日のレーバーデー明け早々にも、アメリカが2000億ドル相当の中国製品に高率関税を課すと発表する可能性がある。今までの500億ドル(340+160)に対する基本25%に加えてのもので、中国とアメリカは貿易担当の次官級で話し合いを始めているが、解決への道筋は見えていない。今までのアメリカの500億ドルの中国製品への高率関税賦課に対して中国は「目には目」で応じてきた。

しかし中国は2000億ドル相当の中国製品に対する新たな関税賦課には、同様の対応が出来ない。アメリカからそんなに輸入していないからだ。だからアメリカの2000億ドル分への中国の対抗措置を予測するのは難しい。規模そのものが大きいのに加えて、対応措置が分からないことに大きな不安がある。あと9月にはFRBの利上げもあるだろうし、それに関連すればトルコ、アルゼンチン、インドネシア、インド、南アフリカ、ロシア、ブラジルへと拡大してきた途上国の市場動揺も不安の種だ。これら国の通貨に対するドル高は継続中。

しかしそれらはまた次週からとして、今週の号では「この目で見た直近のアメリカ」をお伝えしたい。1970年代の後半に4年間駐在して以降も、テレビの仕事などもあり結構回数多くアメリカには行っているが、今回は全くプライベートな旅。ロサンゼルス・オレンジカウンティで3試合連続大谷の試合を見たり、ユニバーサル・スタジオに寄ったり。その後は、3泊4日でニューヨーク(ほとんどマンハッタンでしたが)を歩くといった行程。詰めた予定は入れずに、のんびりアメリカや、その商都であるニューヨークを見るといった旅で、逆にアメリカがよく見られた感もある。その印象を今回はレポートとしたい。

大上段に構えると、今回アメリカを見るに当たってうっすらとあった大きな問題意識は「一体アメリカという国は大国としてのピークを過ぎて衰退に向かっているのか、それともまだあと100年は続く覇権半ばの国なのか」という点だ。問題意識の底にあるのは2049年に「建国100年」となり、その間益々巨大化すると見込まれる中国という国の存在だ。

アメリカの4倍以上の13億の民を抱え、軍備を增強し、そして「中国製造2025」という

野心的な計画を持つ。「中国製造 2025」は 2049 年までに中国が「世界の製造大国」「最強のハイテク国家」としての地位を築くことを最終目標に掲げたもの。その視線の先にあるのは、はるかに日本を越えてアメリカだ。この計画は習近平がしばしば語る「中国の夢」の実現に深く関わる。

アメリカはそれを「自国の覇権への挑戦」と受け止め始めた。だからこそ、トランプという大統領の枠を超えて議会も世論も「対中強硬路線」を根強く支持している。議会での議論、世論調査結果を見るとそうだ。つまりアメリカという国は明らかに中国を「挑戦者」と見なしているが故に、厳しい対中姿勢を維持している。中国の挑戦を受ける形のアメリカ。そのアメリカは今どうなっているのか。それが私の問題意識だった。

《 rich now 》

今回アメリカを歩きながら強く印象に残ったことがある。それは「こんなに豊かになったのか」だった。まあ車が皆大きくて立派になったこと。日本では大きく見える BMW の X5 がアメリカでは小さく見える。

アメリカで走っている車は、日本で言えば全部が大型車。そして重要な事は傷ついた車がほとんどない。私が知っているアメリカは、「ガタガタの車が平気で走っている」「それはアメリカでは車が下駄だから」というもの。しかし今回は「なんでこの方々は揃いもそろってこんな良い車を買えるのだ」と思った。それらの車が比較的静かに高速道路を移動する。ある意味、軽が混じる日本では味わえない圧巻だ。

次に言えば、街がとっても綺麗になった。ホテルはロスの街中ではなくオレンジ・カウンティだったが、街と道はほぼゼロゴミだった。おどろくべき事だ。アメリカでは。というより海外では。「まるで日本だ」と思った。むろんこの地域はエンジェルズ・スタジアムがあり「ねずみの国」がある特殊地域で、アメリカの中でも所得水準が高い。しかし綺麗になったのはニューヨークのマンハッタンもそうだった。

マンハッタンはオレンジ・カウンティのようなことはない。ゴミは昔と変わらず落ちているが、なによりも浮浪者をあまり見掛けない。それよりも驚いたのはマンハッタンにおける街の安全度の格段の向上だ。今回本当に驚いたのは、よく噂されるブロンクスの変貌ぶりよりも、42 丁目と 5 番街角のブライアント公園が「市民の憩いの場」になっていたことだ。多分少し前からそうでしょう。私が訪れなかっただけで。

しかし 70 年代のあそこは「浮浪者と麻薬常習者の集いの場」だった。夜は絶対に近付けない場所だった。それが、..... 昼も夜も市民であふれかえっていた。セントラル・パークは少し前から安全になったことは知っている。しかしそれにしても、今は完全に市民の公園だ。以前はこの公園で女性に対する暴力事件などが頻繁に起きた。この公園の近くに住んでいたが、その時は「夜は近づかない」が原則だった。

変貌したと噂のブルックリンにも足を伸ばしたが、要するにグリニッジ・ビレッジ的な街になっていた。夜食事をし、バーに入ったが、とっても安全だった。そしてこれも接近が

難しかったイースト・ビレッジも、そしてハーレムも今はグレードの高い住宅地になりつつあった。マンハッタンやその周辺からは危険地帯が消えつつある。

むろん、ニューヨークの変わらない側面もある。滞在中はマンハッタンを毎日歩き回った。長く住んでいたのだから、どこに何があるかは分かる。「何が変わったか。何が変わらないか」を見ながら。変わらない部分。それは。渴望的な目をして街を歩く多種多様な人々だ。「渴望的」とは世界中の都市の人間に特徴的で、何か（お金であったり、影響力であったり、もっと誰かと仲良くなりたいたいといった）を求める気持ちを表す目を指す。だから都市は常にアクティブで、満足することがない。

特にニューヨーク、その中心のマンハッタンはそうで、もともと移民の大規模な到着地点だったこともあって、人々の目は「渴望的」だ。常に何かを欲している。どこか不満げで、しかしそれがこの街の活力になっている。

それは私が最初にこの街に来た 1970 年代も、その前も、その後も変わらない。今回もマンハッタンを歩きながらそう思った。朝、昼、夜の風景や音（特徴的なのは、車のクラクションが高層ビルにこだまする点）もあまり変わっていない。しかし何よりも驚いたのはそのセキュリティの劇的な向上だ。「日本と変わらない」という意見の人も居た。そうかもしれない。

《 diversity 》

なぜ？ 経済の活況が大きなファクターであることは間違いない。雇用の増加は人々の意識を安定させる。失業率は歴史的に低い。市や州政府の政策もあるだろう。アメリカは再びセキュリティを伴って「世界で一番豊かな国」になりつつあるように見える。50 年代、60 年代のように。「世界で日本が一番安全を伴って豊かだ」と思っていたが、その確信が揺らいだ。確かに銃の犯罪はアメリカの方が多い。しかし「良くなった度合い」から言えばアメリカの方が上だと思った。ここ数年について言えば。

では何故アメリカ経済は活況なのか。今回の旅で非常に強く印象に残ったことがある。数日過ごしたところで私の頭に浮び、その後確信を深めた。それは「多様性こそこの国の強さではないのか」という、改めての印象だ。むろん以前からアメリカは多様性の国だ。多様な民族、多様な宗教、多様な文化。それらが入り交じっている。

筆者は最近ずっと東京に住んでいて、「東京、しいて言えば日本も以前よりも多様になってきたのではないか」と思っていた。銀行でさえも安全な職場ではなくなりつつある企業社会の変化、それに銀座を歩けば中国人、ヨーロッパ人旅行者を含めて実に多様な人が歩いている。「日本も少しは多様性が増した」と思っていた。しかし今回アメリカに来て「人種的、国土構造的、思潮的、職業的、そして他社への影響度的... 様々な意味での多様性は、アメリカが世界でもまったくもって突き抜けて多様だ」と感じた。

ニューヨークのマンハッタンを歩く。ビジネスの街という位置付けだが、東京のように「サラリーマン的衣装」をまとった人はほとんどいない。「この人は何の職業で生計を維持

している人なのか」と疑問に思う人ばかりだ。恐らく「ハイパーメディアクリエイター」的な職業も多いに違いない。西海岸もそうだ。

実に多様な職がこの国には存在していると想像できる。そして英語圏なので、商売の相手は常に世界だ。そしてデジタル社会の中で、アメリカの「高い流動性」(ヒト、モノなど)がメリットとなっている。多様性と、世界全体をマーケットとして見なしそれをリードする力が、アメリカに「富」を生む。多様性が新たな産業を生んでいる側面がある。そしてその“多様性”においてやはりアメリカは世界で図抜けており、故に「富」を蓄積できているのだと思った。

- - - - -

そしてその中で一つ思ったのは、ドナルド・トランプという実に特異な大統領を敢えて選んだ先の選挙そのものが「アメリカ人による多様性の選択」だったのではないか、という点だ。それまでのアメリカの大統領は、日本人の目から見ても理解が可能な範疇の人だった。主義主張の別はあるにしても。なので、先の大統領選挙では「きっとクリントンが勝つ」と、私を含めて日本のメディアでは99%の人がクリントン勝利を予測した。いやそれを欲した。予測可能なので。

しかしアメリカは彼女を選ばなかった。それはトランプという人の方がアメリカ人の「多様性好み」に合致したからだと思う。政治家らしくない言動、相手を罵るのに発する歯に衣着せぬ発言、数々の女性とのスキャンダル。きっと東部や西部のエスタブリッシュメントでない人々の心のどこかにあった「今までと違う大統領を」という期待に合致したのだ。

なにせ歴代の大統領は選挙の時は選挙対策的な政策を掲げながら、いざ大統領になると従来の思考の範囲を出ない発言や行動しかしなかった。「らしさ」を求められてそれに応じ、公約をないがしろにした。きっと一部のアメリカ人には「政治家は嘘つき」と映っていた筈だ。故に、既存政治家にはアメリカ人のかなりの人は「あきあき」していたのだ。

そこに出てきたのが、ドナルド・トランプというニューヨークのマンハッタンの不動産業を背景とし、テレビでもお馴染みだった男だ。彼は「今までとは違う政治」を語る資格はあったし、それにかなりの国民が惹かれた。

ヒラリー・クリントンも「女性」という大きな多様性の一片を持っていた。しかし彼女には「クリントン」という聞き飽きた名前が付いていたし、政治的主張は従来の範疇から大きく外れるものではなかった。彼女はアメリカ人にとって「女性」というジェンダーを外せば「繰り返し登場した過去の大統領」の範疇に入る人物だった。

《 and market loves diversity 》

アメリカをやや長い視点で見ると時に重要だと思うのは、「トランプという大統領でさえ、このアメリカ人の多様性好みの極一部を構成するにすぎない」という点だ。日本人の多くは彼に不誠実さや、露骨なディールを見て嫌悪感を感じる。しかし実はアメリカには彼を面白いと考える人々が多いのだ。既存の、平気で嘘を付いてきた歴代大統領を見てきただけ

に。トランプはその意味では選挙戦で言ったことは一生懸命実現しようとする。もちろんトランプは平気で別の意味のウソを重ねているが。

非常に重要な点がある。「アメリカは多様性の国」であるからこそ、彼とは違って「嘘をつかないアメリカ」もあるし、「寛容なアメリカ」もあるという点だ。今でもトランプ反対の人々は多い。特に都市部に。最近の世論調査では調査対象となった 60%の人が「(大統領に) 適していない」と判断したと言う。多分、今のアメリカは国全体としては「多様性の選択」でトランプを試しているのだろう。逆に言えば 2 年後か 6 年後か知らないが、アメリカはトランプとは違う「多様性」を持つ大統領を選択する可能性がある。

日本とアメリカの株式市場を見比べながら思う。様々な面（社会構造、文化、人種など）でまだ画一性が残る日本と、多様性の国であるアメリカ。市場はどちらを選ぶだろうか。モノトーンと多様性と。多分マーケットが選ぶのは「多様性」であり、それと表裏一体の「変化」だと思う。「新らしもの好き」がマーケットの常だ。そこには話題と材料がある。

「変化し、かつ多様な国」とアメリカを定義し、その中でドナルド・トランプという特異な大統領まで試していると考えれば、アメリカは実は懐が深いと言える。そしてそのアメリカは今でも簡単に変化も受け入れている。アメリカの企業社会の変化は速い。としたら「株価のアメリカに対する高い評価」はまだまだ続くだろうとも思う。選択肢的にもそうだ。

ニューヨークに関するレポートは来週も続ける予定で、物価などをテーマにしたい。

今週の主な予定は以下の通りです。

09月03日（月曜日）	4～6月期法人企業統計 8月新車販売台数 米国、カナダ、ベトナム市場休場
09月04日（火曜日）	8月マネタリーベース 豪州準備銀行理事会 米8月ISM製造業景況指数 米7月建設支出
09月05日（水曜日）	10年国債入札 豪4～6月期GDP 米7月貿易収支
09月06日（木曜日）	米8月ADP雇用統計 米7月製造業受注 米8月ISM非製造業景況指数 米政府、対中2000億ドル分の追加関税に関する意見募集期限 ブラジル8月消費者物価

09月07日（金曜日）

7月家計調査

7月毎月勤労統計調査

7月景気動向指数

自民党総裁選挙告示

米8月雇用統計

注目の指標としてはやはり「米8月雇用統計」でしょうか。9月の利上げを占う材料となる可能性がある。日経に記事にもあったが、「利上げの打ち止め」時期にも関係する。

《 have a nice week 》

週末はいかがでしたか。アメリカに一週間ほど行っていたので、先週の一週分お休みを頂きました。今は別にどこにいても文章は書けるし、送信できる。行き、帰りとも今回は飛行機の中からFBやlineをしていました。多分原稿も送れる。なので「旅の途中」だからといってレポートを休む理由はあまりない。いつでも書ける。そして送れる。しかし休みには「気分転換」の意味もありますし、いつでも「自分の目」で見ておくことはとっても重要で、「見る方」に力点を置く時間を取ろうとするなら、「書くことは休み」でも良いというのが私の判断です。今回のアメリカへの旅に関しては、まだ書きたいことが一杯有る。次週以降に。

- - - - -

しかしあと一つだけ書いておきましょう。それは「都市の要塞化」です。ニューヨークがとっても安全になったと書きましたが、その一方で実は非常に顕著な変化が進行中です。相矛盾するような。それは「街の要塞化」です。例えばブロードウエーの42丁目から49丁目くらいにかけては、巨大な石やコンクリートブロックの列が両側の歩道を守り、加えて車道との境目に間隔を空けて大きな構造物が作られつつある。

一目見て「車を使ったテロへの備えだな」と分かる。ニューヨークで一番狙われやすい場所と言ったらやはりこのエリアでしょう。ニューヨークを紹介するビデオには必ず登場する。テロをやるサイドが一番「効果」を狙う場所です。なので「防御する」となってくる。

昔からニューヨークは一部が要塞化した街でした。ウォールの文字のごとく、ウォール街の証券取引所の周囲は私が最初にニューヨークに行った1970年代からかなり厳重に守られていた。まるでそこに壁があったことを改めて想起させるように。

しかし今はある意味、ニューヨーク、特にマンハッタンの枢要部分が「要塞化」しつつあるように見える。さすがにチャイナ・タウンには要塞はないし、リトル・イタリーもそう。しかし例えばワシントン広場もそうだったし、セントラル・パークの南のサイドの各所では、要塞のブロックがあちこちに見える。

42から78丁目までは滞在ホテルもあったし結構歩きましたが、歩く側からするととっても安心。これだけ守ったら車テロはないだろう.... と。しかし景観的にはちょっとどうだ

ろうか。多分これは世界中の都市で進んでいる変化だと思う。東京が例外。良いとは思わない。しかし実際に車を使ったテロが頻発している中では、「街を守る」という意味では必要なかも知れない。ロスの中には行かなかったので分からないが、多分ワシントンなどもかなり要塞化が進行していると思う。

その「守られた歩道」を市民や観光客が歩く。悲しいが、避けられない変化ではある。それでは皆さんには良い一週間を。

《当「ニュース」は三井住友トラスト基礎研究所主席研究員の伊藤(E-mail ycaster@gol.com)の相場見解を記したものであり、三井住友信託銀行の見通しとは必ずしも一致しません。本ニュースのデータは各種の情報源から入手したものです。正確性、完全性を全面的に保証するものではありません。また、作成時点で入手可能なデータに基づき経済・金融情報を提供するものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。投資に関する最終決定はお客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。》